

研究業績

本欄には、研究代表者及び研究分担者がこれまでに発表した論文、著書、産業財産権、招待講演のうち、本研究に関連する重要なものを選定し、現在から順に発表年次を過去にさかのぼり、発表年（暦年）毎に線を引いて区別（線は移動可）し、通し番号を付して記入してください。なお、学術誌へ投稿中の論文を記入する場合は、掲載が決定しているものに限ります。

また、必要に応じて、連携研究者の研究業績についても記入することができます。記入する場合には、二重線を引いて区別（二重線は移動可）し、現在から順に発表年次を過去にさかのぼり記入してください（発表年毎に線を引く必要はありません）。

なお、研究業績については、主に2011年以降の業績を中心に記入してください。それ以前の業績であっても本研究に深く関わるものや今までに発表した主要な論文等（10件以内）を記入しても構いません。

① 例えば発表論文の場合、論文名、著者名、掲載誌名、査読の有無、巻、最初と最後の頁、発表年（西暦）について記入してください。

② 以上の各項目が記載されていれば、項目の順序を入れ替えても可。著者名が多数にわたる場合は、主な著者を数名記入し以下を省略（省略する場合、その員数と、掲載されている順番を○番目と記入）しても可。なお、研究代表者には二重下線、研究分担者には一重下線、連携研究者には点線の下線を付してください。

2015 以降

1. HAMAUZU Shinji, Intersubjectivity of Person-centred Care: a phenomenological perspective, at Centre for Person-Centred Care (GPCC), 22nd Sept. 2015, University of Göteborg, Sweden, 招待講演。
2. HAMAUZU Shinji, Dialogue in Psychiatry and Person-centered Care, at the Psychiatric Team for the Elderly, 21st Sept. 2015, Borås, Sweden, 招待講演。
3. HAMAUZU Shinji, Intersubjectivity of Ageing - Reading Beauvoir's *The Coming of Age*, at the seminar for philosophy, 18th Sept. 2015, Helsinki University, Finland, 招待講演。
4. HAMAUZU Shinji, Dialogue in Husserl's phenomenology and psychiatry, at an interdisciplinary workshop "DIALOGUE AND INTERSUBJECTIVITY", 16th Sept. 2015, Helsinki University, Finland, 招待講演。
5. 浜渦辰二, 生老病死と共に生きる—ケアの臨床哲学にむけて—, 日本哲学会編『哲学』, No. 66, 45-61 頁, 査読無 (依頼論文)。
6. 浜渦辰二, 二つの「臨床哲学」が再会するとき、『臨床哲学とは何か—臨床哲学の諸相』, 河合文化教育研究所, 262-279 頁, 査読無 (依頼論文)。
7. 池田喬, アファーマティブ・アクションの哲学—〈男女共同参画〉の規範的論拠をめぐって—, 『理想』第 695 号, 39-51 頁, 査読無 (依頼論文)。
8. IKEDA Takashi, From Perception to Posture: Towards an Alternative Phenomenology of Extended Mind, 京都カンファレンス 2015 「拡張した心を超えて：異邦の身体、人形、女の魂、東洋の精髓」、2015 年 6 月、京都大学吉田南キャンパス、招待講演。
9. ISHIHARA Kohji, Learning from tojisha kenkyu: Mental health “patients” studying their difficulties with their peers. In: T. Shakespeare (Ed.), *Disability Research Today. International Perspectives*. (pp.27-42). London: Routledge. 査読無 (依頼論文)。
10. 石原孝二, 早発性認知症から精神分裂病、統合失調症へ—スティグマの哲学—, 『こころの科学』 180: 107-110 頁, 査読無 (依頼論文)。
11. 石原孝二, 精神病理学と薬物療法, 『精神医学の基盤』 1: 64-71 頁, 査読無 (依頼論文)。
12. 稲原美苗, フェミニスト現象学における障害の身体論の展開—哲学的当事者研究の可能性—, 『大阪大学大学院文学研究科紀要』, 第 55 巻, 1-18 頁, 査読無。
13. 稲原美苗, フェミニスト現象学とその応用—つながりの「知」への展開—, 『理想』第 695 号, 120-32 頁, 査読無 (依頼論文)。
14. 小手川正二郎, 『甦るレヴィナス—『全体性と無限』読解』, 1-344 頁, 水声社, 単著。
15. 小手川正二郎, 男女共同参画と若手研究者支援—男性研究者の視点から—, 『理想』第 695 号, 理想社, 52-63 頁, 査読無 (依頼論文)。
16. 筒井晴香, 「男らしさ／女らしさ」とナラティブとしての生物学的本質主義—男女共同参画の困難の根元を考える—, 『理想』第 695 号, 164-157 頁, 査読無 (依頼論文)。
17. TSUTSUI Haruka, “Brain Gender” Talk and the Relationship between Science and Narrative: Situations in Japan, 『臨床哲学』第 16 号, 61-81 頁, 査読有。
18. 中真生, 生殖の身体性と「選択」、哲学会編『哲学雑誌』, 第 130 巻 802 号, 116-135 頁, 査読無 (依頼論文)。
19. 中真生, 生殖の「身体性」の共有—男女の境界の曖昧さ—, 『理想』第 695 号, 103-119 頁, 査読無 (依頼論文)。
20. 中真生, レヴィナスにおける女性的なもの—性差と主体の二元性—, 京都ユダヤ思想学会編『京都ユダヤ思想』, 第 4 号 (2), 53-86 頁, 査読有。
21. 中澤瞳, 「女性」の身体経験についての現象学, 『精神科学』日本大学哲学研究室, 73-90 頁, 査読有。
22. 齋藤瞳, フェミニスト現象学から考える男女共同参画, 『理想』第 695 号, 133-145 頁, 査読無 (依頼論文)。
23. 齋藤瞳, 妊娠の身体性—フェミニスト現象学の観点から代理出産を考える—, 金井淑子・竹内聖一編『ケアの始ま

研究業績（つづき）

る場所—哲学・倫理学・社会学・教育学をつないで』ナカニシヤ出版、第4章、pp.59-76、査読無（依頼論文）。

24. SAITO Hitomi, Woman's Body and Surrogacy in Japan, Seminar: Feminist Phenomenology, Osaka University, March 24, 招待講演。

2014

25. 浜渦辰二, 尊厳死を法制化するとは、何をすることなのか？—日本とヨーロッパ3国の比較考察—、大阪大学大学院文学研究科哲学講座編『メタフュシカ』、第45号、1-14頁、査読無（依頼論文）。

26. HAMAUZU Shinji, Dementia as a sickness of interpersonal relationship, International conference in Norrköping "Life with Dementia: Relations", 16th Oct 2014, Centre for Dementia Research, Linköping University, Norrköping, Sweden, 招待講演。

27. HAMAUZU Shinji, Towards a Phenomenological Approach to the Problem of Organ Transplantation after Brain Death, Kwok-ying Lau / Chung-Chi Yu (Eds.), *BORDER-CROSSING - Phenomenology, Interculturality and Interdisciplinary*, Orbis Phaenomenologicus, Königshausen & Neumann, pp.113-127, 査読有。

28. IKEDA Takashi, Das Zuhause als übersehener Ort des Denkens: Eine phänomenologische-feministische Perspektive, *Polylog-Zeitschrift für interkulturelles Philosophieren* 31, 15-22頁、査読有。

29. IKEDA Takashi, Body and Needs: Perspectives on how the phenomenology of the female body may prove useful for feminist political activism, 『臨床哲学』vol.15-2, 57-63頁、査読有。

30. 石原孝二, 精神医学における記述的方法と「機能不全」モデル—精神障がい概念と「自然種」—、『科学哲学』47(2): 17-32頁、査読無（依頼論文）。

31. INAHARA Minae, Between Bodies: Rethinking Physical Disability through the Concepts of Abjection and Ressentiment, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座編『メタフュシカ』、第45号、25-38頁、査読無。

32. 小手川正二郎, 恥の現象学—サルトルとウィリアムズを手がかりに、『國學院雑誌』第115巻12号、1-11頁、査読無（依頼論文）。

33. 筒井晴香, 「脳の性」という物語と生きられた経験、日本大学人文科学研究所 哲学ワークショップ第5回「フェミニスト現象学」、日本大学文理学部にて、招待講演。

34. NAKA Mao, On the control of reproduction: prenatal diagnosis in the reproduction technology, in: *Proceedings of the 4th International Conference : Applied Ethics and Applied Philosophy in East Asia*, pp.138-147, 査読無（依頼論文）。

35. 中真生, 生殖と他なるもの、『神戸大学紀要』、第41号、19-52頁、査読無。

36. 齋藤瞳, フェミニスト現象学という観点から考える女性の経験、日本大学人文科学研究所、哲学ワークショップ「フェミニスト現象学」、第5回、日本大学、2014年3月5日、招待講演。

2013

37. 浜渦辰二, ケアの現象学にむけて—現象学の可能性をめぐって（二）—、九州大学哲学会編『哲学論文集』第49輯、109-126頁、査読有。

38. 浜渦辰二, 現代日本における死をめぐる状況、玉川大学人文学研究センター編『Humanitas』第4号、162-173頁、査読無（依頼論文）。

39. HAMAUZU Shinji, Towards Studies of Nordic Caring—A Different Phenomenological Approach, 『臨床哲学』Vol.14-2, 2-20頁、査読有。

40. 池田喬, 研究とは何か、当事者とは誰か—当事者研究と現象学—、石原孝二編『当事者研究の研究』、医学書院、113-148頁、査読無（依頼論文）。

41. 石原孝二, 当事者研究とは何か：その理念と展開、石原孝二編『当事者研究の研究』医学書院、12-72頁。査読無。

42. 石原孝二, 精神病理学から当事者研究へ：現象学的実践としての当事者研究と＜現象学的共同体＞、石原孝二・稲原美苗編『共生のための障がいの哲学』UTCP Uehiro Booklet, No.2, 115-137頁、査読無。

43. INAHARA Minae, The Disabled Body, The Able-bodied Form: A Feminist Exploration of Dialogue between Beauvoir and Fanon, 『待兼山論叢』第47号（哲学篇）、1-17頁、査読無（依頼論文）。

44. INAHARA Minae, The Sound of Pain: Embodied Subjectivity and Onomatopoeic Expressions in Japanese, 『臨床哲学』Vol.15 No.1, 55-69頁、査読有。

45. INAHARA Minae, The Rejected Voice: towards Intersubjectivity in Speech Language Pathology, in: *Disability & Society*, Vol.28 No.1, Routledge : London, 査読有、pp.41-53.

46. KOTEGAWA Shojiro, Comment la subjectivité découvre-t-elle la quotidienneté ou l'universalité ? La question du « tiers » chez Levinas, in: *Cahier de CEM*, n°6, Centre d'études multiculturelles de la maison du Japon, pp. 58-69. 査読有。

47. SAITO Hitomi, Woman-Woman Problems: the Traditional Japanese Female Bodily Expression and Double Oppression,

研究業績（つづき）

Feminist Techno-science and the Theory of the Body: Cases from Japan, Sweden and elsewhere, Centre for Gender Research, Uppsala University, Sweden, March 12-14, 招待講演。

48. SAITO Hitomi, Assisted reproductive technology and woman's body, XXIII World Congress of Philosophy, Athens, Greece, 査読有。

2012

49. 浜渦辰二、北欧ケアと日本のケア哲学の立場からの比較、『地域リハビリテーション』第7巻第12号、1042-1045頁、査読無（依頼論文）。

50. 浜渦辰二、北欧ケア研究のために—もう一つの現象学的アプローチ、『看護研究』、Vol. 45-05、426-438頁、査読無（依頼論文）。

51. 浜渦辰二、応用現象学とケア論—北欧現象学との交流のなかから—、静岡大学哲学会編『文化と哲学』第29号、1-14頁、査読有。

52. 石原孝二・佐藤亮司、統合失調症の「早期介入」と「予防」に関する倫理的問題：「早期介入」の多義性とARMSをめぐって、『社会と倫理』27:135-151頁、査読無（依頼論文）。

53. INAHARA Minae, The Voice of Pain: The Semiotic and Embodied Subjectivity, in: S. Gonzalez-Arnal, G. Jagger and K. Lennon (ed.), *Embodied Selves*, London: Palgrave Macmillan, 180-195頁、査読有。

54. 稲原美苗、痛みの現象学—身体化された語り、『メルロ＝ポンティ研究』Vol. 16、41-61頁、査読無。

55. 齋藤瞳、私の身体はどこまで私のものか、上廣共生哲学寄付研究部門L2「共生のための障がいの哲学」プロジェクト、第8回、東京大学、2012年10月15日、招待講演。

56. 齋藤瞳、女の子のように投げる—女性の運動性と空間性、ワークショップ「フェミニスト現象学の現状と展開2」応用哲学会、第4回大会、2012年4月、査読有。

2011

57. 浜渦辰二、ケアの現象学への途上で—故・渡邊美千代を偲んで—、大阪大学大学院文学研究科哲学講座編『メタフィシカ』、第42号、9-22頁、査読無（依頼論文）。

58. 浜渦辰二、ビジネスとケアをつなぐ倫理、神田外語大学 異文化コミュニケーション研究所編『異文化コミュニケーション23』、123-132頁、査読無（依頼論文）。

59. 浜渦辰二、生老病死について、NPO 法人愛逢編『最期の居場所—暮らしの中のホスピス』、6-25頁、査読無（依頼論文）。

60. 池田喬、生死の存在論から他者依存性の政治哲学へ—共生の哲学のために—、『共生の現代哲学—門脇俊介記念論集— (UTCP Booklet)』、Vol. 18, 179-198頁、査読無（依頼論文）。

61. 稲原美苗、痛みの表現—身体化された主観性とコミュニケーション、『現代思想8月号 特集：痛むカラダ—当事者研究最前線』、青土社、80-95頁、査読無（依頼論文）。

62. 齋藤瞳、フェミニスト現象学とはなにか、ワークショップ「フェミニスト現象学の現状と展開」、応用哲学会、第3回大会（臨時大会）2011年3月、査読有。

63. 齋藤瞳、メルロ＝ポンティの身体論とフェミニズムの身体論、ワークショップ「フェミニスト現象学における身体論の展望—現象学的身体論の拡張として—」日本現象学会、第32回大会、2011年9月、査読有。

2010 以前

64. HAMAUZU Shinji, Identity and Alterity — Schutz and Husserl on Phenomenology of Intersubjectivity, *Identity and Alterity — Phenomenology and Cultural Traditions*, ed. by Kwok-Ying Lau, Chan-Fai Cheung, Tze-Wan Kwan. Orbis Phänomenologicus, Königshausen & Neumann, 2010, pp. 99-112, 査読有。

65. INAHARA Minae, *Abject Love: Undoing the Boundaries of Physical Disability*, Saarbrücken, Germany: VDM Verlag, 2009, pp.1-179, 単著。

66. INAHARA Minae, This Body Which Is Not One: The Body, Femininity, and Disability, in: *Body & Society*, Vol.15 No.1, London: SAGE, 2009, pp.47-62, 査読有。

67. 筒井晴香、通俗的「男脳・女脳」言説がはらむ問題—性差をめぐる脳科学と社会の中の性別、UTCP「脳科学と倫理」プログラム編『脳科学時代の倫理と社会 (UTCP Booklet 15)』、東京大学グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター (UTCP)」、163-188頁、2010年、査読有。

68. 中真生、レヴィナスの“le mal”に見る他なるものとの関係について—身体的苦しみを手がかりに—、哲学会『哲学雑誌』、第119巻791号、2010年、167-185頁、査読有。

69. 齋藤瞳、自然としての身体、文化としての身体、日本メルロ＝ポンティ・サークル編『メルロ＝ポンティ研究』、第14号、84-98頁、2010年、査読有。